

獣医師生涯研修事業のページ

このページは、Q & A形式による学習コーナーで、小動物編、産業動物編、公衆衛生編のうち1編を毎月掲載しています。なお、本ページの企画に関するご意見やご希望等がありましたら、本会「獣医師生涯研修事業運営委員会」事務局（TEL：03-3475-1601）までご連絡ください。

Q & A 小動物編

症例：シーザー、10歳、去勢オス

現病歴：6週間前から鼻汁・鼻詰まりを認めた。2週間前から左上顎が徐々に膨らみ、くしゃみが増加、就寝時に苦しくなって起きてしまうこともある。



図1 左上顎歯肉の外観

視診：左鼻梁部は軟らかく膨隆する。左上唇をめくると左上顎前臼歯レベルの歯肉も柔らかく膨隆しており、第1-3前臼歯は臨床的欠歯であった（図1）。

X線検査：頭部側方斜位像（図2）と背腹像（図3）を撮影した。

生検：隆起部分の針吸引生検を実施したところ、血様漿液が約2ml抜去され隆起部分は陥凹した。抜去された液体の沈渣では赤血球とマクロファージを認めた。

質問1：本症例のX線像の所見を述べよ。

質問2：臨床症状の原因として最も可能性が高い疾患は何か。

質問3：本症例に対する適切な治療法は何か。

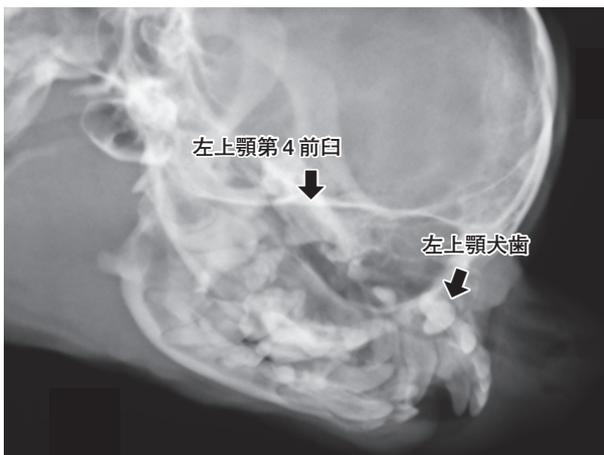


図2 頭部X線像（斜位側方）



図3 頭部X線像（背腹像）

（解答と解説は本誌590頁参照）

解 答 と 解 説

質問1 に対する解答と解説：

左上顎の犬歯と第4前臼歯の間は視診では第1-3前臼歯が欠損していたが、X線像ではこの部位に歯に一致する構造物を3本認める。さらにその周囲の上顎骨には骨融解を認める(図4, 5)。

質問2 に対する解答と解説：

左上顎において、視診では第1-3前臼歯は臨床的欠歯となっており、その領域には腫瘍が存在していた。この腫瘍は上顎骨を融解し、内部には埋没歯と思われる構造を3本含んでいたこと、腫瘍内の液体を抜去すると腫瘍が縮小したこと、その貯留液の性状を総合的に判断すると歯原性嚢胞、その中でも含歯性嚢胞と考えられる。

質問3 に対する解答と解説：

歯原性嚢胞の治療は外科的切除である。埋没している未萌出歯すべてを抜歯し、嚢胞壁もすべて切除することが必要で、嚢胞を内張りしている上皮細胞を残すと再発してしまう。鼻腔・眼窩方向に拡大すると嚢胞壁の切除が困難となるが、その場合は嚢胞壁の搔破や焼烙を併用して上皮細胞を残さないように努める。

嚢胞壁の切除・搔破・焼烙でも取りきれない場合には、嚢胞を含めた顎骨切除も選択肢となる。

本症例ではCT検査にて腫瘍は鼻腔内に浸潤する薄く均一な被膜に包まれた嚢胞状であり、その中に3本の歯が埋没していることを確認した(図6)。その後、口腔内から腫瘍を切開し、埋没歯3本の摘出と嚢胞壁の切除を実施した。鼻腔側の嚢胞壁は出血

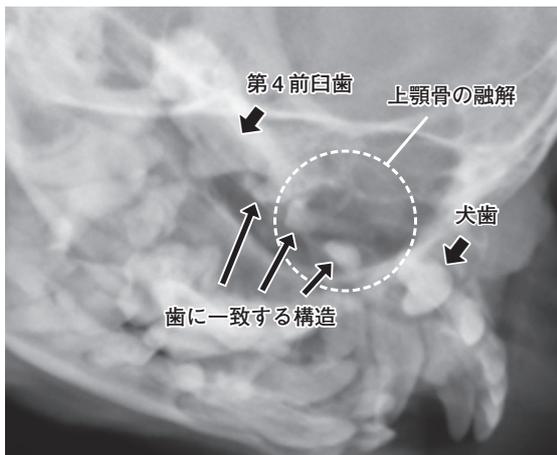


図4 図2の拡大像

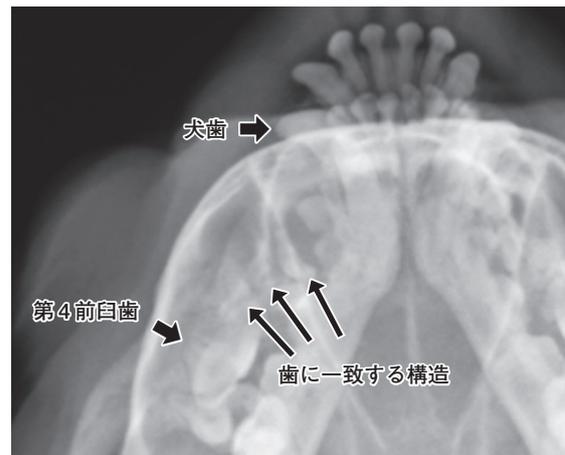


図5 図3の拡大像

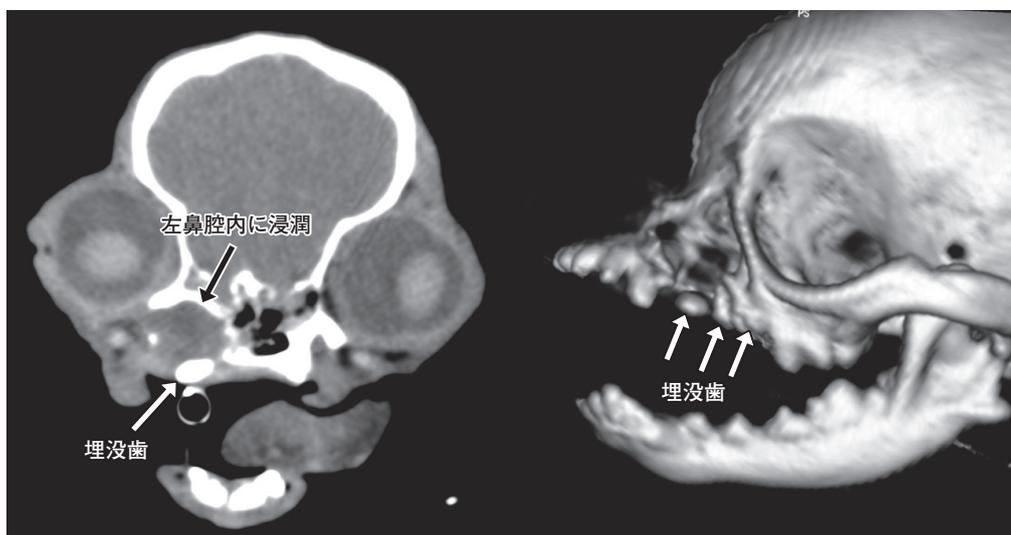


図6 CT画像

が多く摘出が困難であったため、アルゴンプラズマレーザーで嚢胞壁を蒸散し、歯肉フラップにて同部位を閉鎖して終了した。術後は臨床症状が改善し、嚢胞の再発も認められていない。

2017年改訂WHO分類によると、歯原性嚢胞は歯原性発育嚢胞と炎症性発育嚢胞に大別され、それぞれさらに複数の疾患に分類されている。犬では、主に歯原性発育嚢胞に分類されている含歯性嚢胞と

歯原性角化嚢胞、炎症性歯原性嚢胞に分類されている歯根嚢胞（歯髄・歯周疾患関連）が認められる。今回の含歯性嚢胞は歯胚上皮が嚢胞化したもので、犬では短頭種に好発する。そのため短頭種を含め臨床的欠歯がある個体では埋没歯の存在を考慮し、本疾患に留意する必要がある。

キーワード：犬、口腔、嚢胞、埋没歯。

※次号は、産業動物編の予定です